

●ポスターセッション (P-水環境・河川・流域-P-A01～P-A11)

P-A01 は、水源地の環境と水質との関連を無機イオンのヘキサダイアグラムにより比較、検討したものであり、良好な水質には水源地の保全が重要であることを報告した。

P-A02 は、河川堆積物に含まれる有機炭素の形態と鉄の存在形態を測定し、微生物の鉄還元活性との関係をみたものであり、腐植酸鉄の形成には微生物群が深く関与していることを示された。

P-A03 は、農地利用が多い流域において、窒素に着目した河川水質の評価を行ったものであり、調査対象流域における具体的な水質保全策の検討に向けて重要な情報を示すものであった。

P-A04 は、有機汚濁の程度が大きい河川において、流下に伴う溶存有機物の形態変化を調査したものであり、溶存有機物の形態は、流下による変化と下水処理水の流入により変化していることを報告した。

P-A05 は、下水処理場での塩素処理により生成される発ガン性物質 N-ニトロソジメチルアミンの河川水における濃度を調べており、河川水の濃度は低値であったが下水放流水の高い濃度から、下水処理場が主要な排出源となることを報告した。

P-A06 は、水田畦畔や農耕地以外の場所でも広く用いられる除草剤グリホサート、グルホシネートについて、環境水における分析法を確立し、河川水における残留実態を調査したものであり、河川水濃度は生物影響のオーダーから大きく離れているが、水田耕作等との関連で濃度は季節変化していることを明らかにした。

P-A07 は、畑作地帯において、河川水における農薬の検出と農薬の利用実態から流出特性を考察したものであり、農薬利用時期の数週間から数ヶ月後に河川水で農薬が検出されることを示し、この流出特性に応じたモニタリングの必要性を述べた。

P-A08 は、道路凍結防止剤の河川流出の時系列変化を電気伝導率の連続測定と水質分析により調査しており、年による気象条件の差から流出濃度はかなり変化し、生物影響を検討する必要性を示した。

P-A09 は、日用品・医薬品に含まれる PPCPs の河川水における濃度分布と経月変化を調査したものであり、高濃度に検出される物質があること、特定の季節に高い濃度となる物質があることを報告した。

P-A10 は、生活雑排水が流入する河川において医薬品成分の河川水への流出を調べており、生活雑排水の流入が多いと医薬品成分の濃度が高くなること、下水処理後も残留する成分は処理水放流口の下流で高いことなどを示し、人口分布や下水処理の状況と一致することを報告した。

P-A11 は、残留性有機フッ素化合物の東京湾流域の河川水における汚染実態を調査しており、埼玉・千葉などの地域エリアで組成が異なり地域固有の汚染事情があること、2005 年、2009 年の比較から明確な濃度の減少はないことを示した。

((財)九州環境管理協会 環境部 藤井 暁彦)